

# 渋谷からシブヤへ

—— 作家アンナ・ツイマと『シブヤで目覚めて』を語る ——

## 登壇者

アンナ・ツイマ（小説家）

阿部賢一（東京大学准教授、中欧文学研究者、翻訳家）

須藤輝彦（中欧文学研究者、翻訳家、ライター）

## 司会

ブルナ・ルカーシユ（実践女子大学准教授）

本稿は、二〇二一年五月一五日（土）に実践女子大学・渋谷キャンパスで開催され、YouTubeでライブ配信された実践女子大学国文学科特別講演会の記録です。

## 第一部

ブルナ 皆さん、こんにちは。それではこれより、実践女子大学国文学科の特別講演会、作家アンナ・ツイマによるトークイベント「渋谷からシブヤへ」を始めたと思います。

最初に今回の企画の趣旨と全体の流れについて簡単に説明します。今回の企画は「世界文学とジャポニズム」としました。（ジャポニズム）というと、わたしたちはふだん、視覚芸術、つまり絵画とかポスターとか、そういったものを思い浮かべますが、じつはこのような日本趣味、日本文化への関心は、昔から文学作品にもかなり濃厚に表れています。一九世紀の後半から二一世紀の今日にいたるまで、外国人作家によって、日本を舞台にした小説がじつにたくさん書かれています。もちろん、そのなかにはつまらない作品もありますが、面白い作品もたくさんあります。とこ

ろが、今までは、このようなジャポニズム小説はあまり注目されていないと思います。そこで「世界文学とジャポニズム」という企画を立てて、今後も様々なイベントを企画実施して、これらの作品の面白さを追求していきたいと思っています。

本日の特別講演会はこの企画の第一回にあたりますが、チエコ生まれで、現在日本に在住している若手作家のアンナ・ツイマさんをお招きしました。ツイマさんは二〇一八年にデビュー作となる長編小説『シブヤで目覚めて』を刊行しました。この作品はチエコで大変な人気を集め、複数の文学賞を受賞しました。これまで五ヶ国語に翻訳され、そしてつい先月に、河出書房新社より日本語訳も出版されました。タイトルからも分かりますように、この作品は渋谷を舞台としており、今日の会場となる実践女子大学のキャンパスも渋谷にありますので、この企画の第一回としてはもっとも相応しいものではないかと思えます。

それでは、よく聞かれていることではあると思いますが、まずは日本との出会いについて教えてもらえますか。

ツイマ 私が初めて日本に出会ったのは、映画を通じてのことでした。子供のときに、父に黒澤明の映画を見せられたのです。私の父は脚本家ですから、幼い私や私の妹に、

色々な世界の監督の映画を見せたのですけれども、特に黒澤明の映画は私の記憶の中に、強く今でも残っています。私は子供のとき、白黒の映画はあんまり好きじゃなかったのです。一般的に子どもは白黒の映画がちょっとつまらないと思うかもしれませんが、でも黒澤明の映画は初めて見たときには「あ、これは違う、これはすごく面白い」と思っ

て、そして、その場で日本を好きになりました。  
ブルナ 私の子供の頃は白黒の映画しかなかったので、けっこう面白く見ていましたが（笑）。黒澤の映画、若い人からみれば、たぶん「シブイ」と思われますね。

ツイマ 世界的に有名な監督だから、脚本家の父はきっとこの監督を選んで私に見せたと思います。『七人の侍』などは、アクション映画としての面白さもありますし。

ブルナ 黒澤の映画というと、三船敏郎を思い浮かべる人も多いでしょうが、三船敏郎という名前は、ツイマさんの小説にも登場しますね。

ツイマ 十歳のとき、三船敏郎は最高にかっこいい存在だと思っていました。



ブルナ 日本文化との最初の出会いは映画でしたが、日本文学との出会いは。

ツイマ 文学はもう少し後でした。日本のことはだんだん好きになっていきましたので、父から「じゃあ日本文学で何かを読んでみたら」と勧められました。それで最初に芥川龍之介の短編集を読みました。それはたぶん十三、四歳くらいのときで、「鼻」や「羅生門」などの作品が収録されていました。それは私が最初に読んだ日本文学です。もちろんチェコ語の翻訳で読みました。その後は、村上春樹の『ノルウエーの森』とか、いろいろな日本人作家の作品を手に入れて読みました。

ブルナ 村上春樹の翻訳も既にそのときチェコで出ていましたか。

ツイマ はい、出ていました。『ノルウエーの森』の翻訳は確かに出ていたと思います。もちろん今でも春樹が人気作家で、彼の翻訳がたくさん出ています。チェコで日本文学というと、村上春樹しか思い浮かばない読者もかなりいると思います。

ブルナ 西洋では今となって、おそらく村上春樹という現代作家から日本文学に入るといって読者が多いと思います。ツイマさんは最初に芥川龍之介という近代作家の作品を読んでいるのは興味深いです。しかも、「羅生門」や「鼻」というような作品は、かなり単純化して言えば、昔の日本が描かれているのに対して、村上春樹の作品は、新しい、同時代の日本がその作品に映し出されることが多いと思います。芥川や春樹の作品を初めて読んだときは、このような違いを意識しながらその作品を読んできましたか。

ツイマ そうですね、そこは意識していたと思います。舞台や時代が違うのに気づいていました。うちの本棚にあった日本人作家は芥川龍之介だったので、父に勧められたのは当然芥川でした。そして「読んで面白かった」と父に言ったとき、「じゃ他の日本人作家の本を買いに行こうか」と、だいたいこのような感じでした。

ブルナ 西洋ではひと昔、まさに「羅生門」や「鼻」といった芥川の作品に描かれるような（昔の日本）に憧れる人が多くいましたが、今はむしろ村上春樹に代表される（新しい日本）と新しい日本文化に関心を持つ人が多いような気がしますね。

ツイマ そうですね。

ブルナ ツイマさんは、黒澤明監督の映画を通して初めて日本文化に出会い、その後、芥川や春樹の作品を読み、日本文学にも関心を持つようになり、そして、そこから、ツイマさんの小説『シブヤで目覚めて』の題材にもなった、いわば「日本をめぐる冒険」というものが始まったと言えますね。初めて日本に、来たのは？

ツイマ 初めて日本に来たのは、二〇〇九年か一〇年でした。十七歳でした。外国語学校の友だちと一緒に、やく一か月くらい、東京で過ごしました。渋谷に近い広尾で、一か月を文字通り渋谷の路上で過ごしました。つまり、どこかのベンチに坐り、人としやべったり、日常生活を観察したり、こんな感じで一か月過ごしました。それは私の、本当の日本との最初の接触でした。

ブルナ 面白いですね。じつはわたしも日本を初めて訪れたのは、十七歳のときでした。ただ、二十三年も前のことなので、あの時の第一印象はほとんど記憶にありません。どこに行ったか、何をしたか、日々の行動の内容なら少し

覚えていますが、初めて日本を見て日本文化に触れたときに受けた印象は記憶に残っていないですね。おそらくどこかに長く滞在すると、第一印象というものは、第二印象とか第三印象に、つぎつぎと書き直されていくのです。その結果、私はあの頃の印象をよく覚えていないわけですが、ツイマさんは、初めて日本を訪れたときの印象や感動を覚えていきますか。

ツイマ 覚えてますよ。ずっと渋谷にいましたので、忘れるわけありません。ほかもありますが、あのとき、二つのものは、私に強烈な印象を与えました。ひとつは、東京の夜空。星がほとんど見えない、しかも空も黒ではなく、妙に黄ばんでいました。あの夜空にまったく圧倒されました。それから、抹茶のアイスクリーム。緑のアイスクリームを食べる人を見て「へえ、お茶を食べられるの」と、かなりびっくりしました。チェコではお茶は飲み物だけです。

ブルナ 十七歳のときに初めて日本を訪れ、渋谷近辺の路上で一か月ほど、町や人の動きを観察していた、という話が今ありました。あの時、自分が日本で見たことや聞いたことを、日記とかメモとかいにかたちで書きとめることにしていましたか。

ツイマ 日本にいたときは、書こうとしましたが、毎日忙しく、けっきょく何も書きませんでした。チェコに戻ってから、メモのようなものをいっぱい書きました。その時のノートは今でもあります。

ブルナ 貴重な資料ですね。

ツイマ あまり。じつは読んでみると、けっこうつまらないです(笑)。というか、すごくシンプルな記録で、「これがすごい、あれもすごい」といった感じですよ。

ブルナ 十七歳のときに憧れの日本を初めて訪れましたが、それでもちろん、ツイマさんの好奇心といいますか、知識欲が満たされたわけではなく、むしろそれへ日本への関心がいつそう強くなったのでしょうか。

ツイマ 帰国してまもなくカレル大学の日本学科に入学しました。「これをやりたい」というような具体的な目的があつて入ったわけではありません。最初は、日本に関係あるものであれば何でも知りたいという意気込みで入りましたが、修士に入って文学を研究しようと決めました。

ブルナ ちなみに、大学受験は、他の大学や学部を受けず、カレル大の日本学科の専願でしたか。

ツイマ はい、ほかのことに関心がなかったもので、自分にとって、これが唯一のオプションでした。ただ、不安がありました。わたしが日本学科に入ったのは二〇一年のことで、そのころ日本に関心を持つ人がだいぶ増えていました。日本学科の定員は二〇人で、この年志願しているのは二五〇人くらいでした。かなり厳しかったです。あまりチャンスがないと思っていましたが、うれしいことに合格しました。

ブルナ カレル大学の日本学科のことは、ツイマさんの小説にも細かく描かれています。じっさいにはどのようなところですか。日本語訳の帯をみると、そこに「ゴスロリと忍者が闊歩する」と書かれていますね。カレル大学にほんとうに忍者とゴスロリが闊歩するのですか。

ツイマ しません。あれはフィクションですよ。でも、たしかに、いろいろな趣味の持つ人がいます。わたしのよう  
に日本文学に関心を持つ人や歴史に関心を持つ人はもちろん、ほかに、日本のアニメやドラマ、JPOPなどが好きと

いう人までいます。『シブヤで目覚めて』ではこのことを意識して書きました。少し誇張を加えてね。

ブルナ じつは、わたし自身も同じカレル大学の日本学科を卒業しましたが、わたしが大学に入ったのは、ツイマさんよりたぶん十二、三年くらい早いです。わたしのころは、ゴスロリや忍者が出てくることはなかったのですが、刀を持ち歩く、通常「侍」と呼ばれる人がいました(笑)。わたしが大学に入った一九九〇年代の終わりとは、ツイマさんが大学に入ったときの、チェコにおける日本文化の受容状況も大きく違っていましたね。わたしの世代は、まだチェコで本格的に紹介されていなかったもので、漫画やアニメに関心を持つ人はそれほど多くなかったですね。

ツイマ そうですね。私が十二歳だったころにインターネットがだんだん普及し、インターネットでアニメを見られるようになりました。漫画も今ならたくさん翻訳されています。大きな本屋さんであればたいい漫画を置いてあります。

ブルナ それで、ツイマさんは、日本学科を卒業してから修士に入り、今は博士課程に在籍していますが、そのあい

だ、ツイマさんが関心を持つところが大きく変わってきましたね。

ツイマ 学部は、どちらかというところ、日本の社会に関心がありました。卒業論文は、日本のドラマについて書きました。文学とはまったく関係のないものでした。修士課程に入ってから、日本の推理小説を研究しました。社会派と本格派というものを比較してみました。推理小説は面白くて読んでいましたし、大学の図書館で、松本清張の「点と線」のチェコ語訳を見つけて読みました。その前には、例えば、東野圭吾の作品とか、島田荘司の『占星術殺人事件』なども読みましたが、松本清張の作品は、社会背景など、どこか違ふところがあつて、とても刺激的でした。そこで、修士論文ではこのあたりをもう少し詳しく分析しようと思ひました。

そして博士課程に入つてからはまた少し変わつて、戦後文学、とくに六〇年代の文学と学生運動に興味をもつて、今はこの時期の作品、とくに学生を視点人物とする作品を研究しています。

ブルナ 松本清張などの推理小説から、戦後文学と学生運動まで、ツイマさんの日本文学に対する関心も、ほんとう

に多岐にわたつてゐることがよくわかると思ひます。しかも、この時期の文学は研究対象として扱うだけではなく、翻訳もありますね。

ツイマ はい。今年高橋源一郎の『さようなら、ギャングたち』の翻訳を夫のイゴールと一緒に出しました。そしてもうすぐ、島田荘司の『占星術殺人事件』のチェコ語訳も出ると思ひます。

ブルナ ツイマさんは、カレル大学で日本文学を学び、また、日本の大学にも留学し、日本でも日本文学を勉強しましたね。日本文学を海外で学ぶのと、日本で学ぶのと、この二つを経験してゐるわけですが、海外で日本文学を研究するのはけっこう難しいですか。

ツイマ 国によつて違ひますが、チェコの場合はどちらかと言つと、簡単ではありません。例えば、現代文学を研究しようと思つたら、そもそも作品を手に入れるのがけっこう難しいです。チェコ語訳はもちろんいまだ少ないですし、日本語の原作はチェコではなかなか買えないですね。日本だったら、欲しい本があれば、アマゾンですぐに注文できますが、チェコにはアマゾンがありません。だから必要な



本は、日本に住んでいる友だちにお願いで送ってもらい  
しかありません。そういう友だちがいないと研究が難しく  
なります。金と時間もかかります。だから現代文学を勉強  
するのは、ちょっと厳しいです。大正とか昭和初期、明治  
文学なら大学の図書館にある程度資料がありますから、カ  
レル大の学生は、戦前の文学を研究する人が多いと思いま  
す。

ブルナ　こ二十年、十五年でだいぶ変わりましたね。著作  
権が切れている資料が次々とデジタル化され、さまざま  
データベースが、海外でも閲覧できるようにになりましたの  
で、近代文学や近代以前の文学の研究は海外でもできるよ  
うになりましたが、現代文学はやっぱり難しいですね。デー  
タベースもないですし、必要な本をすぐに注文できる、ア  
マゾンのようなサービスもありません。

さて、これまでツイマさんの日本文化との出会いや日本  
文学の研究についていろいろなお話を聞かせていただきま  
したが、次はツイマさんの小説についていろいろ聞きたい  
と思います。『シブヤで目覚めて』はツイマさんの第一作  
ですが、なぜ日本を舞台に選んだのですか。

ツイマ　それにはいくつかの理由がありました。日本の文

化や文学を研究しているのももちろん理由のひとつ  
でしたけれども、この作品を書く前に、わたしはもうひとつ、別の小説を書きあげました。それもできれば出版したいと思っていましたが、友人や家族の人に見せたら、「ダメなところが多い」と言われました。その小説の主人公はあまり面白くない、自分には日本学科に通っている、日本語を勉強しているなど、いろいろ面白い要素があるのに、この作品の主人公がどうしてこんなに面白くないの、と聞かれました。それを聞いたわたしは、カレル大の日本学科を舞台にしようと思って、そこから、大学で経験したことメモったりしながら、小説を書きはじめました。

ブルナ　カレル大学の日本学科に作家としての出発点もあつたわけですね。外国人の作家によって書かれた作品のなかで、日本がさまざまに描かれています。ツイマさんは『シブヤで目覚めて』では、どのような日本を描きたかったのですか。

ツイマ　チェコの読者に、日本のどこを、どのように紹介すればいいか、この問題についてかなり悩みました。チェコでは今でも日本についての一般人の知識は少し浅いです。浅くて、断片的です。チェコで日本と言ったら、多く



の人は、いくつかのキーワードしか思い浮かばないです。例えば、新幹線とか寿司とか、東京、芸者、侍……

ブルナ 忍者とか。

ツイマ そうだね、忍者とか。これくらいしか出てこないです。ステレオタイプが強くて、日本のイメージがちよつと歪められています。わたしはそういうステレオタイプが嫌いだから、日本をもう少し違う角度から紹介しようと思いました。そこで、日本のことに触れている学生、日本語を勉強し、日本文学を研究している人を主人公にしました。でももちろん書いたのは現実の日本ではなく、わたしが想像した日本です。フィクションですから。

ブルナ 日本の現実を書くのではなくて、作者であるツイマさんの目に映った日本を書こうとしたわけですね。新宿とか池袋とかじゃなくて、渋谷を舞台にした理由は何ですか。

ツイマ 池袋に行ったことはなかったし、新宿はあまり覚えていなかった（笑）。渋谷を選んだのは、わたしの記憶のなかに、強く残っていたからです。『シブヤで目覚めて』

のほとんどの部分を書いたのは、留学のため来日した前です。つまりチェコで書きました。自分の記憶や想像力で書くしかなかったのです。だから自分が想像している日本の姿をチェコの読者に見せるようになったと思います。

ブルナ チェコの小説家ミハル・アイヴァスは、小説のなかで外国を舞台にすることが多いですが、舞台として使うところに、取材に行けないときは、ストリートビューを使うなど、ネットでいろいろ調べる、という話を以前、講演でしましたが、ツイマさんはこの作品を書く時、例えば渋谷の描写を書く時、ネットで確認したりしましたか。

ツイマ 確認したかもしれませんが、しかし、わたしは、グーグル・アースとかグーグル・マップというツールはあまり使わないです。なぜかというところ、その場所の、例えば、匂いとかがそこから読み取れないからです。

今書いている作品の取材で例えば熱海に行きました。熱海に行くとき、街にけむりが出ている、とつても綺麗な湯けむりが出ています。そして、独特な匂いがします。そういうところはネットで絶対に調べられません。体でわかるものです。作品を書くとき、わたしはそういうものを書きたいので、グーグル・マップをあまり使いません。グーグル

マップより、経験したか、あるいは完全に想像した場所を書く方が楽しいです。

**ブルナ** この作品のなかで、日本の戦間期の文学が、もうひとつ重要なモチーフになっていますね。ツイマさんは研究者や翻訳家としては戦後の文学に注目していますが、『シブヤで目覚めて』は、一九二〇年代や三〇年代の文学や当時の文壇が映し出されているのですが、なぜこの時代設定にしましたか。ツイマさんにとって、日本の大正時代、一九二〇年代、三〇年代は、どのようなイメージがありますか。

**ツイマ** 作品の主人公のヤナは、カレル大学の日本学科の学生で、戦前の文学を研究している、という設定になっています。さきほどの話と少し重なりますが、カレル大学で現代文学を本格的に研究するのは難しいので、その事情を意識してヤナを書きました。また、わたし自身は最初に読んで日本文学は芥川龍之介という戦前の作家だったのですが、それがわたしに影響を与えたかもしれません。この作品に「川下清丸」という架空の作家が登場しますが、彼が忘れられている作家という設定です。現代作家であれば、ネットとかでさまざまな情報を調べられるので、ここまで、完

全に埋没することはあまりないと思います。情報が残っていない、人の記憶からも消え去ってしまった、存在しない、失われた作家を作り上げたいと思っていましたので、戦前の作家にしました。

**ブルナ** 作品には、横光利一など実在の人物が登場しているし、また、今のツイマさんの話にありましたように、架空の作家も登場し、フィクションとノンフィクション、現実と虚構がたくみに折り重ねられています。とくに日本文学に詳しくない外国の読者はおそらくどこまで現実で、どこからは虚構か、迷ってしまうのですね。そういう大正文学の世界がこの作品のなかで作られています。

大正期といえば、この作品に、関東大震災も描かれていますね。震災の書くときは、どのような調査をしましたか。

**ツイマ** 震災のことを少し調べました。「川下清丸」を書くとき、関東大震災を経験しているはずだということに気づき、そして、それについて書くべきだと思いました。でも、どういう風には書けばいいか本当にわかりませんでした。そこが大きな挑戦でした。チェコには地震がないので、自分にはその経験がなかったのですが、そういうものなのか、知りませんでした。経験のないわたしが、経験のない読者に、

それをどう見せればいいか。結局じっさいに関東大震災を経験した作家たち、例えば、芥川龍之介の日記を読んだり、そこに描かれる震災の描写を読んだりして、ちよつとしたヒントをそこからとり、震災を書きました。

## 第二部

ブルナ それではこれより後半に入りたいと思います。後半は、ツイマさんの小説を日本語に翻訳した阿部賢一先生と須藤輝彦さんに登壇していただき、この作品またはこの作品の翻訳について意見や感想をうかがいたいです。

お二人は今までもちろんチェコをはじめヨーロッパの文学をたくさん読んでいると思いますが、この作品を初めて読んだときは、どのような印象を受けましたか。

阿部 ツイマさんとの初対面は、たしか二〇一八年にプラハで、翻訳家のトマーシュ・ユルコヴィッチとプラハのイジーホ・ス・ポジェブラトというところで飲んでいる時に一緒になった時のことです。それはともかくその方が『シブヤで目覚めて』というタイトルの小説を書いたというのは、すぐ話題になったのですが、正直なところ、タイトルを聞いた時に「あ、また渋谷か」という感じでした。まだ



(左から)ブルナ、ツイマ、阿部、須藤

読む前だったんですが、また『ロスト・イン・トランスレーション』のようなエキゾチックなお話しかなくと思っただけですね。でも、実際読み始めてみると、その印象は覆され、渋谷は一つの出発点なんですけれども、何よりも、物語としてとても面白いというのが第一印象でした。今まで私も何冊か翻訳してきましたけど、『火葬人』とか、『約束』とか、暗い小説が多いんですよね。当然20世紀の暗い歴史、「ナチズム」や「共産主義」を題材にしているもので、どうしても作品として重い作品が多くなってしまふ。それに対してこの作品はとても明るいトーンで、今日のプラハ、今日の東京を描き出していて、そういう意味では新しい小説に出会ったと思います。同時に、面白く読ませる小説であることに衝撃を受けました。

須藤 最初にこの小説を読むきっかけとなったのは、ズナンナ・ロート翻訳コンテストというコンクールでした。これはチェコの現代文学の作品の一部を、世界各国の若手の翻訳家が訳すというものです。国ごとにコンテストがあり、もっとも優れた翻訳に対しては賞が与えられました。僕がこのコンクールに挑戦した時、ちょうどこの作品が課題作品に選ばれました。主人公のヤナが、川下清丸という架空の作家の小説をプラハで訳しているところが課題文でし

た。すごく複雑なところで、「どうだ、これを訳してみろ」「大正文学の堅い文体と現代のポップなヤナの語りを訳し分けてみる」という意図をすごく感じました。チャレンジングでしたが、すごく惹かれる部分もありました。僕はその時ちょうどフランスに留学していたので、研究者としても共感できる場所が多かったですね。十七歳のヤナの方は、言葉もあまりできない状態でシブヤに閉じ込められているんですが、交差点の近くの本屋で、すごく孤独に毎日毎日、語学書を勉強しながら、地道に単語を覚えていくという場面があって。それが自分の留学体験と重なって、非常に引き込まれました。

ブルナ ツイマさんの『シブヤで目覚めて』がチェコで出版されたとき、多くの読者は日本という珍しい舞台に惹かれました。とくに最近はまだこのような作品がないからですね。しかし、それだけではなく、カレル大学を舞台にしたというところも文芸評論家によって評価されました。チェコの最近の文学にはこのようないわゆる大学小説というものがあまりないです。この作品が出たとき、いろいろな意味で非常に新鮮であって、そこが高く評価される理由の一つになったと思います。

阿部先生と須藤さんは中欧文学やチェコ文学を研究して

いますが、今まで読んだチェコ文学との違い、あるいは逆に共通点や類似点など、何かそういうところがありますか。つまり、新しいチェコ文学におけるこの作品の位置づけということになりますか……

**阿部** 新しさですね。新しい小説としていろいろ特徴があります。学生、留学を題材にした小説、ある意味、留学生の小説でもあります。これはチェコ文学ではあまりない視点だったと思います。あとは、やっぱり二都物語だということですよ。プラハと東京という二つの都市を舞台にして、双方の都市の文化の違いなどのコントラストが浮かび上がってくる二都物語という構造になっているということと、もう一つはやっぱり小説内小説というか、枠構造の中で、ヤナが川下清丸を発見していく、訳していくというかたちで、小説の中で小説が展開するというかたちです。要するに、単に日本が舞台になっているだけではなく、この小説自体の新しさというのがあるかと。チェコの作家による小説ですが、中央ヨーロッパや日本という文脈でもあまりない現象でしょう。あと新しいということでもう一点言うと、おそらくツイマさんが色々と影響を受けているなかで、やっぱり日本文学から非常に大きな影響を受けているということ。おそらくはじめは翻訳で日本文学を読

んで、その後は日本語の原書を読まれたと思うんですけども、日本文学の流れに位置付けた方がよい作家だと。チェコ出身の作家だから、チェコ文学となる必要は全然なくて、チェコ出身だけど、日本文学のある種の系譜を引いたような形になって、ある種、トランスナショナルな文学といえます。そういう意味ではとても新しい現象だなと思うんです。たまたまチェコ語で執筆されていますが、おそらく構造は、村上春樹の『世界の終わり』とハードボイルドワンダーランド』とか、ある種とても日本文学の伝統を引き継いで出来上がっているように思います。チェコ文学の伝統より、むしろ日本文学の伝統の中に『シブヤで目覚めて』を位置づけた方がふさわしいようにも思います。そういう意味ではチェコ文学、日本文学といった二分法ではない、かといって越境文学ということでもなく、新しい日本文学に移植されたチェコ文学という感じはしますね。

**ブルナ** チェコ文学とか日本文学とか、そういう枠組みの中で考えるというより、世界文学という大きな枠組みの中で考えた方が……。

**阿部** その方が多分色々見える部分があるのかなとは思っています。

ツイマ たしかにチェコ文学より日本文学の方を読んでました。

須藤 今の話、丁度すごくピンとくるところがあって。この小説は〈シブヤ編〉と〈プラハ編〉で分かれていて、〈プラハ編〉は阿部先生で、〈シブヤ編〉は僕というかたちで分担して訳したのですが、最後の方はほとんど全部〈シブヤ編〉なんですね。で、訳し終わった時に「これはもう日本文学なんじゃないか」というか、それこそ「あるべきところに帰した」という感じがしました。日本語に訳すことで、この小説を日本文学というか、日本語文学の空間にぽつと置くところできたんだな、という感銘がありました。最後の舞台、全部シブヤですし。あと、物語としても、〈日本性〉とか〈チェコ性〉とかは関係ないところで成立してるとい気がしますしね。

阿部 だから翻訳文学なんですけど、やっぱり日本文学の中にこれが入り込んできたというのが、非常に訳した我々の感覚としては、日本語の中に、アンナ・ツイマという作家を位置付ける作業を翻訳で行なった感じはしますよね。

須藤 今後、「ポストアンナ・ツイマ」が日本文学の世界にも生まれるかもしれないですね。

阿部 そうですね。

ブルナ 今の話にもありましたように、この作品は、阿部先生と須藤さんが二人で協力して日本語に翻訳しましたが、『シブヤで目覚めて』は、日本の渋谷を舞台にしているという点や、大正期の日本の社会とか歴史が出てくるという点を見ると、今までお二人が翻訳家として関わってきた作品とは、異なる点が多いでしょう。

阿部 そうですね。私は正直、はじめはこの作品を翻訳するのは少し躊躇しました。何といっても新しいチェコ語だし。しかも新しい日本語で置き換えなきゃいけないところもあって、それはもつと若い人がやった方がいいじゃないかと思っていたのが一つありました。そこで、たまたま須藤さんが翻訳コンテストに参加され、須藤さんの翻訳がともよかったので、彼とだったらより若いチェコ語にできるんじゃないかという後押しがあったというのはあります。あとは、一番新しいチェコ語だけではなく、様々なレイヤーがあります。翻訳者としては難しい、大正昭和



期の文学が入ってくるという点は、難儀した点です。それこそ、今までにない翻訳体験と言いますか、これまではチェコとかプラハとか、要するに日本語の世界にはない世界を日本語で新たに作り出すものでしたが、ツイマさんの小説は、日本語にすでに存在する「芥川の世界」とか「横光利一の世界」にさりげなく、そっと「川下清丸の世界」を疑似的に作り出していくという作業だったので、今までの翻訳とは作業手順としては別物です。今回は、ツイマさんのおかげで横光利一などを数多く読みましたし。その翻訳のはじめの箇所は須藤さんがうまく訳したんですけど、そのあたりはいかがですか。

**須藤** 実在する作家の中では、横光利一がたぶん一番直接的に、キーパーソンという感じで出てきますね。なので僕は訳す時に、横光利一を参考にしようと思ったんですよ。丁度このくらいの時代だなと思って。でも、横光利一を読むと、実は言葉がそんなに古くないんですよ。だから、ヤナの語りの中に横光利一の文体を置いてもありインパクトもなければ差別化もできないので、大正・昭和初期感を残しつつ、あえて古いんだけど読めるくらいのところ突くという、バランスが非常に難しかったですね。だから実際の横光利一や同時代の作家を直接には参照せず、それより

ちよつと古い文体で訳すようにしました。

**ブルナ** 私がこの作品を初めて読んだときは、一番強く刺激されたのはこの作品のユーモアです。この語り手は、若いチェコ人の女性で、彼女はチェコでの生活やチェコの大学、シブヤを見ても、ズバっと自分の意見を言ってしまう、決して客観的な視点ではなくて、かなり主観的なところがありますね。そして、その中には、若者のユーモアや誇張がけっこう入っています。これを日本語に翻訳するのまたなかなか難しいですね。

**須藤** 難しい。いかに日本語にヨーロッパ的なユーモアがないかということを実感しました。とくにチェコ人に多いのは、思っていることと全く逆のことを言うってパターンがあるじゃないですか。汚いものに対して、「すごくきれいだね」みたいな。つまんないものに対して「たいへん興味深いですね」って言う感じ。それをどう訳すのかという部分がほんとに難しかったですね。

**阿部** アイロニーですよ。文字通りに書いてあることとは逆の意味で、チェコの人は言うことが多いと思います。ただ日本人はどうしても文字通りに読む傾向が強い。先ほ



ど朗読していただいた箇所でも、冒頭、渋谷の路上に座っている人の描写で「2メートルのヒール」という表現があります。多分ぱつと読むとおそらく「あれ、誤訳？」とか思われるんですけども、2メートルなんですよね。ある種の誇張なので、そこはあえてわかるように傍点をふりました。ユーモアがユーモアとして通じるというのは、共通理解がないとなかなか難しい。とはいえ一方で、例えば、「七人の侍」の映画を見たチェコの男子学生が彼女に印象を訊くと、「侍多すぎ」と答えるとか、そのあたりも面白くて、こういうユーモアもいっぱいあったので、通じる部分もあると思います。

**ブルナ** 今の話とちよつと関連しているのですが、この作品はもちろん、チェコの読者を対象に書かれています。チェコの読者は、日本という舞台に惹かれた人も多かったと思いますが、これを日本語に翻訳すると、当然に全部が反転して、作品の読み方もころりと変わってしまいますね。日本の読者はこの作品のどこに注目すると思いますか。

**阿部** どうですかね。例えば、プラハが舞台になっていきますけど、途中のセリフにあるように、カレル橋とかプラハ城といった名所は出てこない。大学、飲み屋ばっかりが出

てくるんですが、そういう意味では、この作品を読むとプラハがわかるかという点、あんまりわからないかもしれないかなど。でも、雰囲気としては「いつも学生がビールばかり飲んでるな」という感じはわかると思います。逆にチェコ語版の方には、注が多く付いていて、芥川龍之介など、固有名詞には注がついていたので、日本語版でもそういうことも考えたんですが、逆に日本の読者は横光利一、芥川龍之介は知っているので、注は最低限にしました。固有名詞に関して言えば、大作家の名前だけではなくて、居酒屋の「とりとんくん」とか、実際プラハにあるカフェとかの名前が出てくる。関心ある方がいれば、そういう固有名詞を頼りに実際の東京あるいはプラハをたどることができるかなと思います。

**須藤** 『シブヤで目覚めて』ツアーができますね。

**阿部** 『シブヤで目覚めて』ツアーを。目覚められない、出られない、というパターン。

**ブルナ** ツイマさんは、自分の作品を日本語で読んでどのような印象を受けたのですか。

ツイマ 読んだときはすごく良く訳されているとまず思っ  
て、すごく楽しく読みました。自分の作品を読んで楽しかつ  
たというのほはちよつとおかしいかもしれませんが、やはり  
翻訳の場合、翻訳家が作品の中を、半分以上も新しく作り  
直さなければなりません。それで翻訳の場合は自分の作品  
を楽しんで読めるということが言えるなと思います。楽  
しかったです。

阿部 途中、原稿の段階で一回目を通していただいて、致  
命的なミスとか落ちの部分とか、いくつかアドバイスして  
いただいたので、きつとチェコ語版より面白くなつてると  
思います。こういうことは普通はできないですね。チェコ  
の作家さんは日本語がわからないので、もちろんどうして  
もとという場合は、単語の意味やニュアンスを訊くことはあ  
りますが、今回のように全面的に見ていただいたというの  
は貴重な体験でした。怖かったですけどね(笑)

ブルナ 厳しいコメントもありましたか。

阿部 ここは笑いが、落ちがないよ、というのはありません  
た。そこは少しわかるようにしました。

ブルナ それでは最後には、質問の方に移りましょう。ま  
ずは、カレル大学の若者スラングの訳し方について、「一  
番難しい表現とか訳しにくい箇所があれば教えていただけ  
ますか」という質問があります。

阿部 どうですか。須藤さん。

須藤 カレル大の若者スラング。とにかく罵倒系の言葉に  
色んなバリエーションがあつて、それを日本語でどう訳す  
のかという問題がありました。日本語では、「クソ」くら  
いしかないじゃないですか。

阿部 日本語ではあまりバリエーションがないですね。  
あとは例えば「マゴ」とかです。日本語に訳しにくくて、  
驚きとか色んな表現があつて苦労しました。あとは新しい  
表現、例えば、村上作品のことを「ムラカーチエ」という  
新しい言葉をツイマさん使われていています。これは日本語  
に置き換えられなかったですね。他にも新しいチェコ語表  
現があつて、十分にできなかったのはちよつと心残りです  
ね。

ブルナ 語り手は、十七歳と二十四歳という若い女性なの

ですが、翻訳の際に、日本の若者、特に若い女性の話し言葉とかについて調べたりしましたか。

阿部 いや、十七歳と二十四、五歳くらいと想定して、若い女性であるだけではなく、チェコで日本文学を勉強している点も大事かと。逆に日本で考えたと、東京外大でチェコ語を勉強してるとかそういう人の層なんですよ。となると、ある程度、若いだけではなく、比較的インテリ層の使う言葉かと思えます。ですから、本当に十七、八歳の高校生のすごい先端的な言葉ではおそろくないんですね。ですから、ちよつと落ち着いた日本語訳におそろくなつてますね。だから、ちよつと必ずしもその部分是对応しないかもしれない。

ブルナ 次に行きましょうか。「小説中にある「渋谷の書店にレモンを置く」といった日本文学の題材は欧州でどこまで理解されているのか気になります」というコメントがありましたか、いかがでしょうか。

阿部 「書店でレモンを置く」というのは梶井基次郎……。

ツイマ そう、梶井基次郎の『檸檬』で……。

阿部 チェコの読者にはわかりますかね？

ツイマ わからないと思います。

阿部 梶井基次郎自体が知られていないですね。

ブルナ 梶井の作品の翻訳は、少なくとも単行本としては一つも出てないですね。

ツイマ 私が知っている限り、まだ訳されていません。

阿部 そうですね。こういう日本文学へのオマージュがツイマさんの場合はいくつもあって、名前があつてわかるところと今の「書店でレモンを置く」とか、暗示的に日本文学へのオマージュがなされているところは結構あるんですね。そこは翻訳者が「これはこうです」って注を付けるものではないので、ぜひ読者の皆さんに探していただけばと。

須藤 日本語を読める読者だけに与えられた特権ですよ。ね。

ブルナ この作品の一つの特徴的なところですね。

阿部 そうですよ。本当。だからそういう日本文学へのオマージュが散りばめられているので、それをネタバレするの下の世話なことなので、それはぜひ読者の皆さんに。

ブルナ 「ツイマさんが影響を受けたチェコの作家がいたら教えてください」というコメントもありましたが。

ツイマ チェコ……そうですね。まあ、子どもの時、日本文学を読み始めた前には、例えば、カレル・チャペックの短編集を、父と一緒に読んだ経験を覚えていきます。『一つのポケットから出た話』はおすすめてです。良く書かれた短編集だと思います。

ブルナ 次の質問を見てみましょう。「訳した日本人の目から見て、ここはまさに日本だと思った点、逆に日本ではありえないなと考えた点はどこでしたか」。

須藤 基本的に、主人公の目を通した日本であって、日本のものが三人称的に描かれてるわけじゃないので、ヤナの切り取り方や見方自体を面白がるっていう楽しみ方をし

ましたね、僕は。

阿部 先ほど言おうと思って忘れていたのですが、日本のイメージですが、ここで描かれているのはたしかに日本や東京、渋谷なんですけど、やっぱり私たちの知らないトウキョウ、シブヤなんです。ただそれは私が知らないからといって、本物が偽物かという話じゃないと思います。このツイマさんの小説の面白いところは、私たちが知っていると知っている渋谷とか日本の姿を違う角度から浮かび上がらせてくれたという点ですよ。誇張されているところもあるとは思いますがそこはあまり気にならなかったですね。個人的にはね。

ブルナ それでは最後には、阿部先生、須藤さん、それからツイマさんに一言挨拶をお願いします。

須藤 そうですね。アンナさん、阿部先生からとても良い機会をいただいで、この小説を翻訳できたことは自分にとっては何のすごく面白い経験で、今後も一生ないようなめぐり合わせで翻訳が出来たので、とても嬉しく思います。この場を借りて感謝させていただきます。ぜひ皆さん、読んでください。

阿部　そうですね。この小説自体が翻訳小説という側面があつて、東京にいるヤナとプラハにいるヤナが一つになつていきますが、その彼女が川下清丸という人物の作品を翻訳しながら自分の道を見つけ、分かれているものが一つになつていくお話しです。じつさいの翻訳でも、須藤さんと私が分かれて訳していたものが最後一緒になつていくという意味では、自身が最終的には翻訳小説としてまとまつていく。今、須藤さんがおっしゃったように、この翻訳自体が減多にない経験だつたと思います。まずこういう機会を与えていただいたツイマさんに感謝したいのと、共訳者の須藤さん、そして編集者の方にも感謝したいと思つています。あとは、小説は読まれないと小説にならないので、ぜひ皆さんに読んでいただいて、色んな感想を色んなところで聞かせていただければと思います。ツイマさん。

ツイマ　確かにきれいな土曜日、天気の良い土曜日に皆さんご参加いただき、誠にありがとうございます。そして、ブルナさんと実践女子大学の皆さんに色々お世話になつて感謝します。そして、読者の皆さん、お時間があるようでしたら『シブヤで目覚めて』を読んでいただければ、それを私にとって何よりですからどうぞよろしくお願ひします。

ブルナ　ありがとうございます。短い時間でしたけれども、ツイマさんの小説『シブヤで目覚めて』について、またその翻訳について色々面白い話があつて、とても充実した内容だつたと思います。須藤さん、阿部先生、ツイマさん、今日はどうもありがとうございます。先ほども言いましたが、このような作品には、つまらないものもありますが、とても面白い作品もあります。ツイマさんの『シブヤで目覚めて』は、今日の話を聞いて皆さんもお分かりだと思いますが、もちろん後者の方で、とても面白い小説なので、まだお読みでない方はぜひ読んでみてください。